

雄勝稲作情報

No.5 令和7年7月4日



発行 ● こまち農業協同組合
うご農業協同組合
湯沢主食集荷商業組合
湯沢市農業総合指導センター
東成瀬村農業総合指導センター
秋田県農業共済組合
監修 ● 雄勝地域振興局農林部農業振興普及課
雄勝地方病害虫防除員協議会

生育状況について（6月25日現在）

雄勝地域振興局定点調査結果「あきたこまち」8地点平均
平均田植日：本年5月22日（平年5月22日、前年5月21日）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)
本年	41.7	412	8.7	45.3
平年	36.6	377	8.8	44.8
平年比	114%	109%	-0.1葉	101%
前年	40.8	416	9.5	45.1
前年比	102%	99%	-0.8葉	100%

6月25日現在の生育は、平年と比べて、草丈は長く、茎数は多く、葉数と葉色は平年並に推移しています。

6月2半旬から高温多照に推移し、生育量が十分に確保できたほ場が多くなりました。分げつ発生のための浅水管理を継続して、目標茎数が確保できたほ場では、すでに中干しが実施されています。一方、春の耕起作業の遅れに伴い、田植え作業が遅れて目標茎数に満たないほ場も見られ、例年と比べて、ほ場間差が大きくなっています。

中干しの実施について

すでに中干しの時期に入っています。高品質・良食味米の安定生産には、強勢茎（主茎及び第3～6節の1次分げつ）を主体に穂数を確保することが重要です。目標茎数を確保したほ場では速やかに中干しを行います。m²当たり420本（坪当たり70株植えて、1株20本、60株植えて1株23本）を中干しの目安とし、強い中干しは避けましょう。中干しは7～10日間程度とし、ほ場に軽く亀裂が入り、足跡のつく程度とします。

① 目標茎数が確保できた場合（本年度はこの傾向にあります）
主茎の葉数が8.1～9.0葉期で第6葉目からの分げつが発生した時点で中干しを開始します。8.5葉期から深水処理による分げつ抑制を行った場合は、9.5葉期を目処に中干しを行います。

早めに中干しを実施し、根域の拡大を促します。なお、水不足が心配されるほ場では、強めの中干しは避けるなど工夫しましょう。

② 目標茎数に満たない場合
浅水管理を行い、分げつ確保に努めましょう。また、異常還元（ワキ）による生育停滞が発生している場合は、一時的に落水（2日間程度）を行い、根の活力維持に努めましょう。

中干し後の水管理について

中干し終了後は、効率的な水の利用を心がけましょう。中干し後は、間断かん水主体の水管理を行いましょう。

近年、中干し後から葉色が急激に低下し、作柄・品質の変動要因となっています。ほ場の過乾・過湿に注意し、茎の充実と根の健全化を図りましょう。

生育診断を行い適正に追肥を実施しましょう

7月はいよいよ幼穂が発育し、収量や品質に大きな影響を与える大切な時期です。「生育診断」を実施し、追肥の判定や適正な水管理と防除に努めましょう。

あきたこまちの生育診断時期（幼穂形成期）は、平年であれば平坦部で7月10～15日頃、山間部では7月15～20日頃が目安です。

調査は水口や水尻を避け、生育が揃った場所で行います。畦畔から少しほ場の中に入り、生育の平均的な株を選びましょう。

●幼穂長を調べましょう！

平均的な株の一番背の高い茎を選び、根のつけたまま抜き取ります。葉鞘を丁寧にむいて幼穂の発育状況を見ます。茎の中央部をカッターで真っ二つに切ると簡単に確認することができます（図1）。

幼穂長が1～2mmになった時点で「幼穂形成期」（出穂24日前）となり、出穂期を予測することができます（図2）。

図1 幼穂長の見方

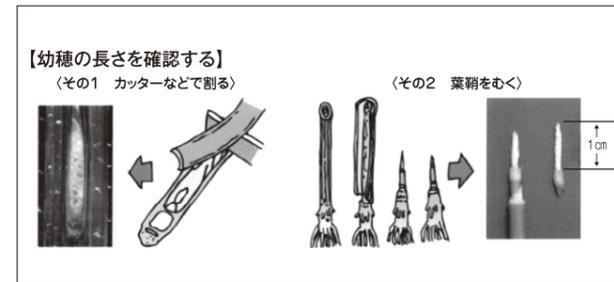
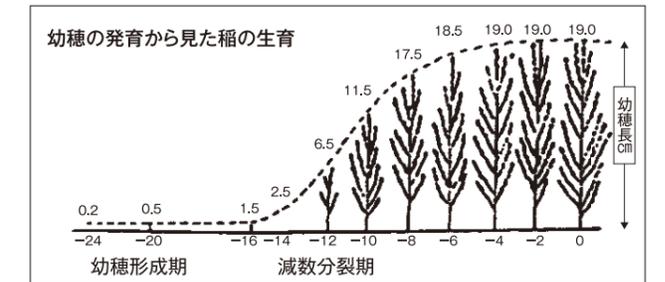


図2 幼穂長の発育から見た稲の生育



●幼穂形成期の生育診断（栄養診断）方法

- ① 草丈を測ります。幼穂形成期の目安は60～64cmです。
- ② 1株当たりの茎数を数えます。
- ③ 葉色は曇天や朝夕に太陽を背にして見ます。診断する葉は、上から2枚目とします。
- ④ 生育指数を計算します。

生育指数 = 草丈 × m²当り茎数 ※m²当り茎数 = 1株茎数 × 坪当り茎数 ÷ 3.3

※生育診断の例

例-1) 70株植えて葉緑素計値が45の場合
草丈60cm × 1株茎数26本 × 70 ÷ 3.3 = 33 (×10³)…VI型

例-2) 60株植えて葉緑素計値が42の場合
草丈60cm × 1株茎数26本 × 60 ÷ 3.3 = 28 (×10³)…III型

- ⑤ 生育診断（栄養診断）を行い、穂肥の可否を判定します。
- ⑥ 穂肥の判定について
生育診断（栄養診断）で穂肥が可能な場合は生育型にあわせて窒素成分量で1～2kg/10a追肥します。

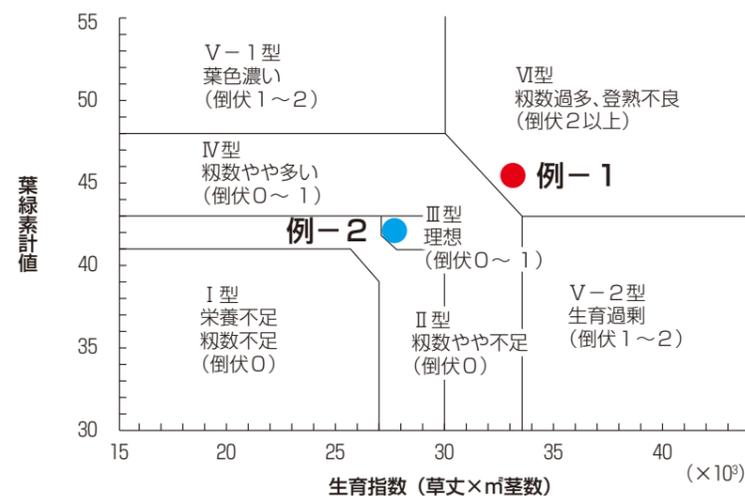
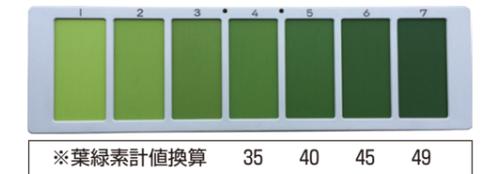


表1 穂肥の判定

生育型	倒伏の危険性	窒素追肥 (kg/10a)	
		幼形期	減分期
I型(栄養不足)	少	2	2
II型(籾数やや不足)	↑	2	2
III型(理想)	△	ムラ直し1kg	2
IV型(籾数やや多い)	↓	なし	2
V-1型(葉色濃い)	なし	なし	ムラ直し1kg
V-2型(生育過剰)	なし	なし	ムラ直し1kg
VI型(登熟不良)	大	なし	なし

葉色カースケール（水稻用）



出穂期前の病害虫防除対策について

秋田県病害虫防除所の情報によると、葉いもちの発生時期はやや早い（前年より早い）、発生量はやや少ない（前年並）となっています。

斑点米カメムシ類の主要種となるアカスジカスミカメの発生時期はやや早い（前年よりやや遅い）、発生量はやや少ない（前年よりやや少ない）となっています。

●葉いもち

- ・まだ取置苗を放置しているほ場があります。葉いもちの伝染源になるので、**直ちに土中に埋没処分**してください。
- ・苗からの持ち込みがある場合は早期に多発するため、地域内の巡回を徹底し早期発見、早期防除に努めてください。
- ・持ち込みによる発病が確認された場合は、**直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン剤、トライ剤）の莖葉散布**を実施してください。その後は、**必要に応じてビーム剤を追加防除**します。



葉いもち
縦に長いひし形の病斑。縦に褐色の線が伸びる。

農薬名	剤型				散布量 (10a)
	粉剤DL	ゾル	フロアブル	粒剤	
ブラシン	○		○		粉剤DL：3～4kg フロアブル：1,000倍 (60～150L)
ビーム	○	○			粉剤DL：3～4kg ゾル：1,000倍
トライ	○		○		粉剤DL：3～4kg フロアブル：1,000倍 (60～150L)
コラトップ				○	コラトップ1キロ粒剤12：1～1.5kg コラトップ粒剤5：3～4kg

注) フサライド剤（ラブサイド・ブラシン）、トリシクラゾール剤（ビーム）の本田での総使用回数はそれぞれ3回以内、テブフロキン剤（トライ）は2回以内なので注意する。

●稲こうじ病

- ・前年に本病が発生した圃場では、本年も多発する恐れがありますので注意してください。
- ・感染時期は穂ばらみ期で、この時期に雨が多いと感染しやすくなります。発生すると等級低下に繋がるので注意が必要です。
- ・薬剤による防除法は次のとおりです。常発地では次のいずれかの薬剤で防除します。

薬剤名	散布時期	散布量 (10a)	散布回数	備考
トライフロアブル	出穂 20～10日前	100～150L	1回	希釈倍数：1,000倍
Zボルドー粉剤DL		3～4kg		銅剤は高温時には葉害を生じやすいので夕方の涼しい時に使用する
モンガリット粒剤		3～4kg	1回	湛水状態で均一に散布し、散布後4～5日は入水しない

残草対策について

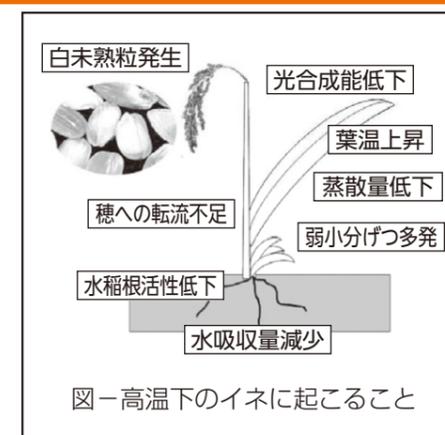
～中・後期除草剤の一例～

残草の種類	除草剤名	使用時期/使用量	展着剤	成分数
ノビエのみ	クリンチャーEW	移植後20日～ノビエ6.0葉期まで（収穫30日前まで） 使用量100mL/10a、散布液量25～100L/10a	○	1
	トドメMF1キロ粒剤	移植後14日～ノビエ5.0葉期まで（収穫50日前まで） 使用量1kg/10a ※湛水状態で散布	—	1
	トドメMF乳剤	移植後14日～ノビエ7.0葉期まで（収穫50日前まで） 使用量200mL/10a、散布液量100L/10a	×	1
ホタルイ、コナギ、オモダカ等	バサグラン粒剤	移植後15～50日（収穫60日前まで） 使用量3～4kg/10a ※落水状態または浅水状態で散布	—	1
ノビエ及びホタルイ、コナギ、オモダカ等	クリンチャーバスメ液剤 トドメバスメ液剤※	移植後15日～ノビエ5.0葉期まで ※トドメバスメ液剤はノビエ6.0葉期まで（収穫50日前まで） 使用量1000mL/10a、散布液量70～100L/10a	×	2

※詳しくはJAまたは農薬販売店へご相談ください。

登熟の向上を図る水管理

- 出穂後30日間は間断かん水を実施し、土壌水分を保持しながら稲体の活力を維持します。
- 特に、開花後25日間は、土壌水分が不足しないように注意します。
- 気温が日中で30℃以上、夜間で25℃以上の場合、地域みんなで協力して掛け流しかん水などを行い、地温を下げ、根の機能減退を防止します。
- また、フェーン現象など乾燥した風が強い日は湛水状態を保ち、水分蒸散による稲体の消耗を軽減します。
- 落水時期は出穂後30日頃を目安**とし、イネの登熟度やほ場の作業性を考慮しながら決めます。
- 高温登熟の恐れがある場合、早期の落水は白未熟粒や胴割れ等の品質低下、登熟歩合の低下による収量への影響が考えられます。



こまめに水分や休憩を取りましょう！

農作業中の熱中症による死亡事故は7～8月に集中しています。

- 高温時の作業と単独作業は避け、のどがかわいていなくても20分おきに毎回コップ1～2杯以上の水分補給をしましょう。

●LINEで水稻栽培に関する情報発信を行っています！

秋田県稲作技術情報「秋田の米ちから」



<主な配信内容>

- ・秋田県内の水稻の生育状況
- ・水稻および大豆の技術情報
- ・異常気象対策
- ・その他、秋田米に関する情報



友達追加はこちら

